

特別支援学校等における新型コロナウイルス感染症対策 に関する考え方と取組

(令和2年6月19日版)

文部科学省では、「新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン」、「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル」、「学校活動の実施等に関するQ&A」などにより留意点を示すとともに、臨時休業中の学習指導やICTを活用した学習等の取組事例など参考となる事例を周知してきました。

このたび、各学校において障害のある幼児児童生徒（以下「児童生徒等」という。）へ、感染症対策を行いながら教育活動を行うに当たり、以下の具体的な場面毎の基本的な考え方・考えられる取組・実際の取組例等をまとめました。

本資料を、これまで文部科学省が示してきたガイドラインやマニュアル等を特別支援学校や障害のある児童生徒等の個別の状況に応じて検討・実施していただく際の参考にして、引き続き、地域の感染状況や学校の状況を踏まえて、学校における感染症対策や学びの保障に取り組んでいただくようお願いいたします。

具体的な場面等

1. 登下校.....	1
2. 消毒.....	5
3. 感染症予防のための指導等.....	8
4. 感染のリスクの高い学習活動への対応.....	11
5. 給食.....	14
6. 寄宿舎.....	16
7. 居場所の確保・放課後等デイサービスとの連携等.....	18
8. ICT等を活用した家庭における学習.....	20
9. 医療的ケアが必要な児童生徒等への対応.....	23

1. 登下校

【学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル（令和2年6月16日）】（抜粋）

2. 基本的な感染症対策の実施

(1) 感染源を絶つこと

①発熱等の風邪の症状がある場合等には登校しないことの徹底

②登校時の健康状態の把握

登校時、児童生徒等の検温結果及び健康状態を把握します。登校時の健康状態の把握には、「健康観察表」¹などを活用します。家庭で体温や健康状態を確認できなかった児童生徒等については、登校時、教職員が検温及び健康観察等を行います。

③登校時に発熱等の風邪の症状が見られた場合

発熱等の風邪の症状がみられる場合には、当該児童生徒等を安全に帰宅させ、症状がなくなるまでは自宅で休養するよう指導します。

なお、特に低年齢の児童等について、安全に帰宅できるよう、保護者の来校まで学校にとどまることが必要となるケースもありますが、その場合には、他の者との接触を可能な限り避けられるよう、別室で待機させるなどの配慮をします。また、保健室については外傷や心身の不調など様々な要因で児童生徒が集まる場所であるため、発熱等の風邪症状のある児童生徒が他の児童生徒と接することのないようにします。

7. 登下校

登下校時には、上記の「休み時間」と同様、教員の目が届きづらいことに加えて、特に交通機関やスクールバスへの乗車中は、状況によっては「3つの密」が生じうることを踏まえ、以下のような工夫や指導が必要です。

- ・登下校中については、校門や玄関口等での密集が起こらないよう登下校時間帯を分散させます。
- ・集団登下校を行う場合には密接とならないよう指導します。
- ・また、夏期の気温・湿度が高い中でマスクを着用すると、熱中症のリスクが高くなるおそれがあります。このため、登下校時には、人と十分な距離を確保できる場合には、マスクを外すようにします。
- ・公共交通機関をやむを得ず利用する場合には、マスクを着用する、降車後（または学校到着後）は速やかに手を洗う、顔をできるだけ触らない、触った場合は顔を洗うなどして、接触感染対策などの基本的対策を行うほか、できるだけ乗客が少ない時間帯に利用できるようにするなどの配慮を検討します。

¹ 「健康観察表」は、児童生徒等の朝晩の体温、体調、同居家族の状況、保護者のサイン等を記入し、登校時に持参します。

スクールバスを利用するに当たっては以下のことが考えられます。

- ・利用者の状況に配慮しつつ、定期的に窓を開け換気を行うこと
- ・乗車前に、家庭において検温し、発熱が認められる者は乗車を見合わせる
- ・可能な範囲で運行方法の工夫等により、過密乗車を避けること
- ・利用者の座席を離し、それが難しい場合は、会話を控えることやマスクの着用について徹底すること
- ・利用者に手洗いや咳エチケット等を徹底すること
- ・多くの利用者が触れるドアノブ等を消毒すること

(1) 基本的な考え方

特別支援学校では、多くの児童生徒等がスクールバスを利用する場合があります。スクールバスを利用する児童生徒等の障害の種類や程度は様々であり、走行中の安全確保に留意が必要な児童生徒等や乗り降りに介助が必要な児童生徒等も乗車しています。このため、特別支援学校におけるスクールバス利用時には、通常の感染防止対策に加えて、児童生徒等の安全確保のため個別に必要な配慮や介助職員等の乗務員の感染症対策への一層の留意が必要です。

また、下校の際には、学年等毎に教室を出る時刻をずらしたり、教職員が保護者対応や放課後等デイサービス職員との引継ぎを行う場所を分散して設けたりするなど、下校に伴う移動、乗車、引継ぎ等のための環境に配慮する必要があります。

(2) 考えられる取組

○スクールバス

(乗車人数の抑制)

- ・一台当たりの乗車人数を抑制するため、スクールバスを増便したりジャンボタクシーを利用したりする。
- ・分散登校を行う場合は、スクールバスの利用状況や運行ルートも考慮して、分散登校する児童生徒等のグループを編制する。
- ・保護者等の協力を得られる場合は、自家用車等での送迎をお願いする。

(乗車時の確認)

- ・乗車前に健康観察表を確認したり、必要に応じて検温したりするなどの健康観察を行い、体調の優れない児童生徒等は乗車を見合わせる。
- ・乗車前に手指消毒を行いマスクの着用を確認する。
- ・児童生徒等が触れる箇所を限定したりするため、座席を指定席にし、可能であれば座席の間隔を開けて座らせる。

(介助)

- ・ 運転士や乗務員も乗車前に検温等の健康確認、手指消毒、マスクの着用を行う。
- ・ 乗務員は介助毎に手指消毒を行う。

(換気)

- ・ 乗降時等の停車中に窓を2か所以上開けて換気を行う。
- ・ 走行中においても、特に低学年や知的障害のある児童生徒等の安全や気候に配慮した上で、可能な場合は窓を開けて換気を行う。

○保護者等による送迎

- ・ 送迎する保護者等の健康確認も行うようお願いする。
- ・ 保護者等が一定の場所で待機する場合、保護者等が密集することのないよう、待機場所を分散して設ける。

○下校時

- ・ 下校時には、スクールバスまでの昇降口の周辺が密集しないように、児童生徒等が教室を出る時刻をずらすなどの工夫を行う。
- ・ 保護者対応や放課後等デイサービス職員との引継ぎ等で時間がかかる場合には、密集を避けるため、玄関外やホール等の別の広い場所に移動して行う。
- ・ 登校中や登校後に体調不良になった児童生徒等を保護者が迎えに来るまでの対応者、待機教室、使用するトイレ、下校までの動線等を予め決めておく。

(3) 取組例

○高知県立高知若草特別支援学校

- ・スクールバスの乗車率を 50%程度に抑えるため、4 コースのうち 1 コースのみ福祉タクシーを併用しています。



○熊本県立黒石原支援学校

- ・保護者の自家用車による登校時に、効率的に健康観察を実施できるよう、学部・課程（学習グループ）によって登校時間をずらした上で、一方通行の流れになるよう職員が誘導し、乗車したまま健康観察を行うドライブスルー方式を実施しています。再確認が必要な場合は、別の場所で養護教諭等が再度聞き取りや検温を行い、登校できるかどうかを判断しています。



2. 消毒

【学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル（令和2年6月16日）】（抜粋）

③消毒

学校では様々なものを共用しており、用具や物品の共用を避けることができれば避けるようにしますが、消毒できるものについては消毒を行い、使用後には手洗いをするように指導します。

消毒を行うに当たっては、使用する製品の新型コロナウイルスへの有効性や安全性、使用方法等について、信頼できる情報源や取扱説明書等をよく確認の上、適切に行ってください。また、学校薬剤師等と連携することも重要です。

1) 日常的な消毒について

○消毒液等について

- ・物の表面の消毒には、消毒用エタノールや0.05%の次亜塩素酸ナトリウム消毒液²を使用します。また、一部の界面活性剤で新型コロナウイルスに対する有効性が示されており、それらの成分を含む家庭用洗剤を用いることも有効です。
- ・「次亜塩素酸水」は、「次亜塩素酸ナトリウム」とは異なるものです。「次亜塩素酸水」の新型コロナウイルスに対する効果については、独立行政法人製品評価技術基盤機構（NITE）において検証試験が継続中であり、現時点でまだ結論は出ていません。³

○消毒の方法について

- ・児童生徒等がよく手を触れる箇所（ドアノブ、手すり、スイッチなど）や共用物は1日に1回以上、消毒液を浸した布巾やペーパータオルで拭きます。
- ・トイレや洗面所は、家庭用洗剤を用いて洗浄します。
- ・消毒作業中に目、鼻、口、傷口などを触らないようにしてください。
- ・換気を十分に行います。

○エタノールを使用する際の注意点について

- ・エタノールを布等に含ませ、消毒対象を拭き、そのまま乾燥させます。
- ・揮発性が高く、引火しやすい性質があるため、電気スイッチ等への直接の噴霧は故障や引火の原因になります。

○次亜塩素酸ナトリウムを使用する際の注意点について

² 児童生徒等には次亜塩素酸ナトリウムを扱わせないようにしてください。

³ 独立行政法人製品評価技術基盤機構（NITE）「次亜塩素酸水に関すること QA」

<https://www.nite.go.jp/information/osirasefaq20200430.html>

- ・次亜塩素酸ナトリウムで消毒する際は、必ず手袋を着用します。なお、ラテックス製ゴム手袋を使用する場合はラテックスアレルギーに注意が必要です。
- ・手指消毒には使用しないでください。
- ・色落ちしやすいものや腐食の恐れのある金属などには使用しません。
- ・非常にアルカリ性が高く、薄めた液でも材質によっては変色や腐食を起こす場合があることから、拭いた後は必ず清潔な布等を用いてしっかり水拭きし、乾燥させます。
- ・希釈した次亜塩素酸ナトリウムは使い切りとし、長時間にわたる作り置きはしないようにします。
- ・次亜塩素酸ナトリウムの噴霧は、吸ったり目に入ったりすると健康に害を及ぼす可能性があるため、絶対に行わないでください。
- ・製品の使用上の注意を熟読の上、正しく取り扱ってください。

○次亜塩素酸水の噴霧について

- ・「次亜塩素酸水」を消毒目的で有人空間に噴霧することは、その有効性、安全性ともに、メーカー等が工夫して評価を行っていますが、確立された評価方法は定まっていないと言われていています。メーカーが提供する情報、厚生労働省などの関係省庁が提供する情報、経済産業省サイトの「ファクトシート」などをよく吟味し、使用について判断するようお願いいたします。なお、児童生徒等の中には健康面において様々な配慮が必要な者がいることから、使用に当たっては、学校医、学校薬剤師等から専門的な助言を得つつ、必要性や児童生徒等を与える健康面への影響について十分検討して下さい。

(1) 基本的な考え方

特別支援学校には、例えば、視覚障害により手で触れて文字や形を確認したり、図書館等の拡大読書器、立体地図や人体模型等の触教材や教具を共有したり、手すりを利用して廊下を歩いたりする児童生徒等が在籍しています。多くの児童生徒等が触れるところは頻繁に消毒を行ったり、触れた後に手洗い（手指消毒）を行ったりするよう指導することが必要です。

(2) 考えられる取組

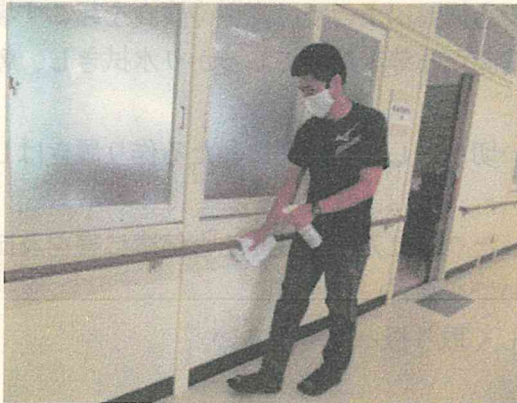
○共用部の消毒

- ・点字の掲示物、触教材、車いすの手の触れる部分、階段や廊下の手すりなど、多くの児童生徒等が触れる箇所は定期的に消毒を行う。
- ・トイレ内に設置されている介助用ベッドは使用後に消毒を行う。
- ・チェックリスト等を活用するなど、消毒の実施状況が確認しやすい様式の工夫や教職員の役割分担を明確にしておく。
- ・消毒等の感染症対策を行うためにスクール・サポート・スタッフ等を活用する。

(3) 取組例

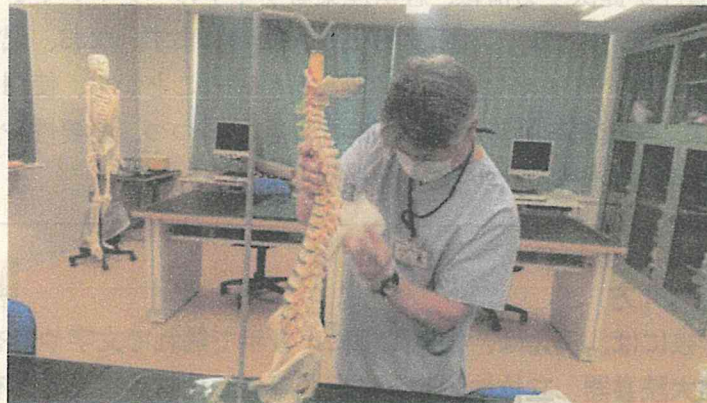
○沖縄県立盲学校

- ・授業の前後に教職員が手すりやドアノブの消毒を行っています。



○北海道札幌視覚支援学校

- ・人体模型等の触教材は、生徒が触察確認することから、授業前後に細部まで消毒を行っています。



3. 感染症予防のための指導等

【学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル（令和2年6月16日）】（抜粋）

感染経路を絶つこと

①手洗い

接触感染の仕組みについて児童生徒に理解させ、手指で目、鼻、口をできるだけ触らないよう指導するとともに、接触感染を避ける方法として、手洗いを徹底します。様々な場所にウイルスが付着している可能性があるため、外から教室等に入る時やトイレの後、給食（昼食）の前後など、こまめに手を洗うことが重要です。手洗いは30秒程度かけて、水と石けんで丁寧に洗います。また、手を拭くタオルやハンカチ等は個人持ちとして、共用はしないように指導します。

登校したら、まず手洗いを行うよう指導します。手指用の消毒液は、流水での手洗いができない際に、補助的に用いられるものですので、基本的には流水と石けんでの手洗いを指導します。

②咳エチケット

咳エチケットとは、感染症を他者に感染させないために、咳・くしゃみをする際、マスクやティッシュ・ハンカチ、袖、肘の内側などを使って、口や鼻をおさえることです。

「密接」の場面への対応（マスクの着用）

①マスクの着用について

学校教育活動においては、近距離での会話や発声等が必要な場面も生じうることから、飛沫を飛ばさないよう、児童生徒等及び教職員は、基本的には常時マスクを着用することが望ましいと考えられます。

ただし、次の場合には、マスクを着用する必要はありません。

- 1) 十分な身体的距離が確保できる場合は、マスクの着用は必要ありません。
- 2) 熱中症などの健康被害が発生する可能性が高いと判断した場合は、マスクを外してください。
- 3) 体育の授業においては、マスクの着用は必要ありません。

(1) 基本的な考え方

障害のある児童生徒等においても、基本的な感染症対策は同様ですが、認知の特性により手洗いや咳エチケットの指導の徹底が難しい児童生徒等や感覚に過敏がありマスクを常時着用できない児童生徒等が在籍しています。こうした児童生徒等には、特性に応じた配慮を検討することが必要です。

(2) 考えられる取組

(児童生徒等が理解しやすい指導)

- ・ 知的障害のある児童生徒等の中には、感染症対策の必要性を理解することが難しい場合もあるため、当該児童生徒等が理解できるように、手洗いや咳エチケット、必要以上に手を目や口に当てないこと等を理解しやすい視覚的な教材で示すことにより、感染症対策や行動様式の理解を促していく。
- ・ 近距離で対面となる場面等ではマスク着用するといったルールを本人と確認して決めるなど、マスクを着用すべき場面とそうでない場면을具体的に示し、児童生徒等の理解を促していく。

(感覚に過敏のある児童生徒等への配慮)

- ・ 自閉症等の児童生徒等の中には、感覚が過敏な者がおり、マスクの着用を受け入れられない場合がある。こうした場合、皮膚に触れる素材の種類によっては受け入れられる場合があることから、保護者とも相談し、本人に合ったマスク素材を探したりする。
- ・ マスクのゴムを耳にかけることで皮膚感覚の過敏が伴う場合などには、後頭部で止める装具等を活用する。
- ・ 教室内の席配置を配慮するなど接触感染防止策を講じた上で、マスクを着用することができないことについて意思表示カード等を活用して周囲への理解を図る。

(障害のある幼児等への指導に当たっての配慮)

- ・ 幼児期の特性を踏まえ、幼児が感染症予防の必要性を理解できるように説明を工夫するとともに、幼児自身が自分でできるようになっていくために十分な時間を確保すること。
- ・ 幼児については、マスク着用によって息苦しくないかどうかについて、教職員及び保護者は十分に注意すること。

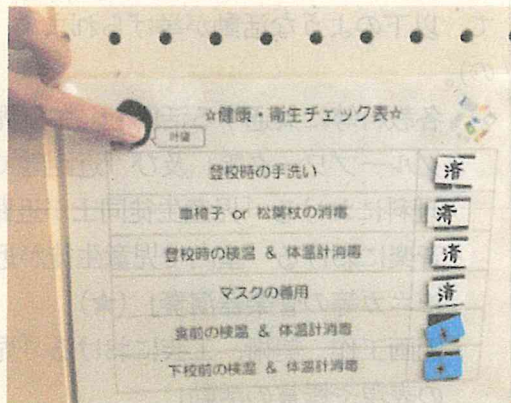
(必要なコミュニケーションの配慮)

- ・ 感染症予防のための指導が過度なコミュニケーションの制約にならないよう、体調が悪い場合や悩みがある場合などは必要な意思表示を行うよう指導する。

(3) 取組例

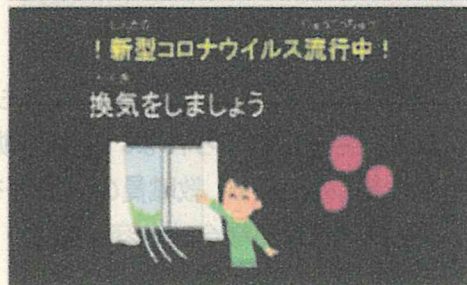
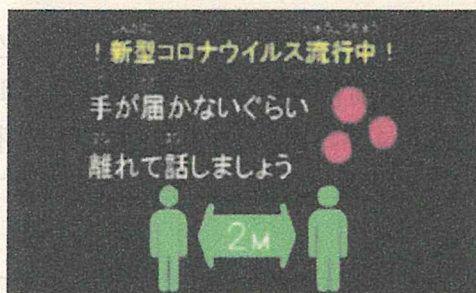
○沖縄県立鏡が丘特別支援学校

- ・手洗いの動画を見ながら、方法や時間について一緒に確認しながら意識付けを行っています。また、感染症対策のチェック表を作成し、自分でマグネットを裏返すことで意識付けを図ったりしています。



○福岡県立福岡聴覚特別支援学校

- ・新しい生活様式の内容を絵や文字を通して理解し、意識が持続するように、廊下天井に設置する情報提示システム(モニター)に常時掲示しています。(見える校内放送)



4. 感染のリスクの高い学習活動への対応

【学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル（令和2年6月16日）】（抜粋）

1. 各教科等について

各教科における「感染症対策を講じてもなお感染のリスクが高い学習活動」として、以下のような活動が挙げられます（「★」はこの中でも特にリスクの高いもの）。

- ・各教科等に共通する活動として「児童生徒が長時間、近距離で対面形式となるグループワーク等」及び「近距離で一斉に大きな声で話す活動」（★）
- ・理科における「児童生徒同士が近距離で活動する実験や観察」
- ・音楽における「室内で児童生徒が近距離で行う合唱及びリコーダーや鍵盤ハーモニカ等の管楽器演奏」（★）
- ・図画工作、美術、工芸における「児童生徒同士が近距離で活動する共同制作等の表現や鑑賞の活動」
- ・家庭、技術・家庭における「児童生徒同士が近距離で活動する調理実習」（★）
- ・体育、保健体育における「児童生徒が密集する運動」（★）や「近距離で組み合わせたり接触したりする運動」（★）。

なお、特別支援学校等における自立活動については、教師と児童生徒等や児童生徒等同士が接触するなど、感染リスクが高い学習活動も考えられます。個別の指導計画に基づく自立活動の一つ一つの具体的な指導内容について、実施の可否や代替できる指導内容について検討するなどの見直し等を行い、適切な配慮を行った上で実施してください。

（1）基本的な考え方

特別支援学校や特別支援学級でも感染のリスクの高い学習活動の考え方は同様ですが、接触の避けられない自立活動や介助を行う際は、同じ場所で学習している児童生徒等の人数や、教職員の人数等を踏まえつつ、必要な対策を取った上で実施し、対策が取れない場合は内容・方法・時期を見直す必要があります。

（2）考えられる取組

（リスクの高い活動の対応）

- ・友達同士で手をつないだり触れたりするような活動など、児童生徒等が密接・密集する活動は当面行わない。
- ・発音や発語など、口や舌を動かしたり、息や声を出したりする学習の際は、透明マスク、フェイスシールド、アクリル板等を用いる。或いは、直接の構音指導を

避け、口や舌の動き、息や声の調整などの素地となる口の体操など代替の指導内容を取り扱ったり、教師による師範を動画に替えて取り扱ったりする。

- ・児童生徒等の距離を空けたことにより意思疎通が難しくなる場合は、スクリーンを使うなど意思疎通を行いやすくなるような配慮を行う。

(教職員と児童生徒等の接触によるリスクの低減)

- ・教職員は児童生徒等に触れる前後に手洗い（手指消毒）を行い、可能な場合は担当者を固定し、教職員が複数の児童生徒等に触れないようにするとともに、児童生徒等が触れる教職員も限定する。その際、固定や限定が相互のストレスにならないよう、必要に応じて一定期間でローテーションするなどの工夫も考慮する。
- ・児童生徒等の実態によっては、教職員がマスクに加えアイシールドやフェイスシールドを併用して指導に当たる。
- ・校外の指導者を受け入れて指導を行う場合は、校外指導者の検温、手洗い、マスク着用等も徹底し、使用する教室を限定し、可能な場合は在校時間を短くする。

(3) 取組例

○福岡県立福岡聴覚特別支援学校

- ・飛沫感染を防ぎながら授業中に教師の口元や表情が見られるよう、教卓と座席の間に透明シートを吊るしています。また、教師は常時フェイスシールドを着用しています。



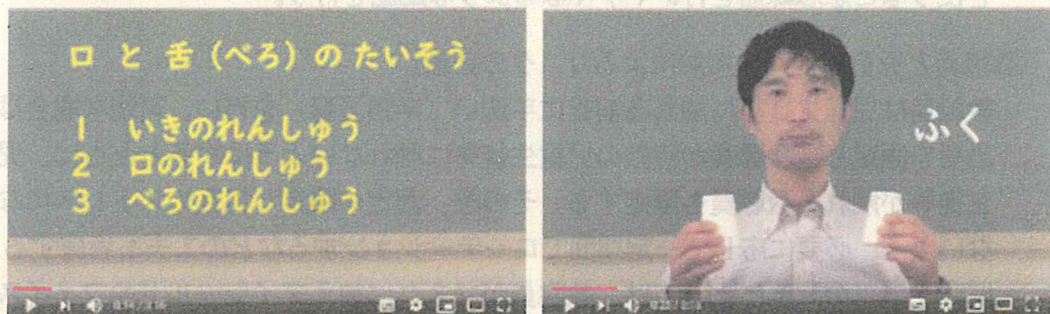
○埼玉県立特別支援学校坂戸ろう学園

- ・透明アクリルパネルを自作して、言葉の指導などを行っています。



○千葉県教育委員会

- ・発音や発語に関する学習の動画を作成しました。家庭学習だけでなく学校の授業でも、児童生徒等が動画を見て、教師から直接指導を受けることができます。



○沖縄県立鏡が丘特別支援学校

- ・児童集会を行わない代わりに、児童会の新役員の紹介動画を作成し、登下校時に児童生徒が通る玄関に設置して放映しています。



○秋田県立聴覚支援学校

- ・体育館で意見発表を行いました。生徒同士の距離を空け、生徒や教師は手話を使って発表を行い、発表内容をスクリーンに提示するほか補聴システムを通して音声を聴き取りやすくしています。

